

まほろば【校長室だより】

[文責]

校長 江口 尋信

17日(木)の人権学習の参観・懇談について

明日は人権学習の参観・懇談です。子どもたちの学習の様子を参観し、本校の人権教育について理解を深めていただけたら幸いです。

さて、法務省は、21世紀は「人権の世紀」であり、「人権の実現とは、何よりも人権が尊重され、人権侵害が生起しない社会、すなわち人権尊重社会を築くことであり、そのために人権教育及び人権啓発が重要であることは言うまでもない。」と述べています。人権尊重社会とは、一人一人の個性や多様性を尊重し、異なる考え方や生き方を認め合い、支え合いながら、共に生きる社会だとされています。学校は、そういった社会を創る子どもたちを育てていく役割があると言われています。

「君は君 我は我なり されど仲良き」(あなたと私は違う。互いの違いを尊重し、それでも仲良くしよう) これは、明治から昭和にかけて活躍した小説家、武者小路実篤の言葉です。実篤が言う「仲良き」とは、表面上の「仲良し」を指しているのではなく、互いを一人の自立した人間として認め、違いを受け入れた上で仲良くすることを意味しているのではないかと思います。詩人 金子みすゞも「私と小鳥と鈴と」という詩で、それぞれに違いはあるが、みんな素晴らしいということを作品で語りかけます。どちらも「人権尊重社会」に通じる言葉です。違いを非難したり、違いを理由に排斥したりするのではなく、認め合いながら折り合いをつけていく。そのような生き方をしたいものです。

明日の学習が、武者小路実篤の「君は君 我は我なり されど仲良き」や金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」につながることを願っています。

「ドパガキ」とは？

報道番組を何気なく観ていたところ、「ドパガキ」特集が放送されていました。私は初めて聞く言葉でしたが、みなさんはご存知ですか。「ドパガキ」とは、「ドーパミン」＋「ガキ」が語源で、スマホやタブレット等でショート動画やゲーム、刺激の強いコンテンツを観続けることで、刺激を追い求めて集中力が続かなくなった若年層を揶揄する言葉だそうです。インタビューを受けていた若者は、「何時間もショート動画を見て1日が溶ける。」と話していました。「1日が溶ける」という表現が心配になります。また、あるお母さんは、わが子の変化について、「以前はお絵描きや好きなことをじっくりしてたが、ショート動画ばかり観るようになって集中力がなくなったように思う。」と話していました。一方、動画を長時間視聴している子どもは「授業を最後まで聞けなくなった。」と話していました。外国では、ショート動画に規制をかける等の動きがあるようです。子どもの頃に電子機器が普及し、様々な刺激的なコンテンツがあれば、私も「ドパガキ」になっていたかもしれません。

刺激的なコンテンツにばかり触れていると、刺激から逃れなくなるそうです。先ほど紹介した若者のように「1日が溶けて」しまいます。昼夜逆転し、学校や仕事に行くことさえ面倒になる人も増えているそうです。これは少しもったいない、損をしていると思いませんか。私たちの生活の中には、すぐに「こたえ(答え・応え)」が出るわけではありませんが、ゆっくり味わうことで面白くなるものがたくさんあるように思います。好きな本を読む。映画を鑑賞する。音楽を鑑賞する。仕事に打ち込む。誰かと会話をする。ぼんやり考える。電子機器に時間を奪われるのではなく、そういう時間を自分で取り戻せるかどうか、これからは大切なのだらうと思います。